

動機善なりや、私心なかりしか

大きな夢を描き、それを実現しようとするとき、「動機善なりや」と自らに問わなければなりません。自問自答し、動機の善悪を確認するのです。

また、仕事を進めていくうえでは、「私心なかりしか」という問いかけが必要です。自己中心的な発想で仕事を進めていないかを自己点検しなければなりません。

動機が善であり、私心がなければ、結果は問う必要はありません。必ず成功するのです。
「稲盛和夫 一日一言」より

今月は、今年の1月に続き稲盛和夫さんの箴言のご紹介になります。少し前のことになりますが、今年の5月8日の日本経済新聞に KDDI(株)の高橋誠社長が(株)ローソンの共同経営に過去最大の約 5000 億円を投じることを決断した経緯等に関する記事が掲載されました。その中で、高橋社長が最終的な決断をするまで、稲盛さんのこの箴言を胸に臨んだことが触れられており、正に創業者の遺訓として、この箴言が、時代を超えて今もなお生き続けていることに感銘を受け、あらためて皆さんにご紹介しようと思った次第です。

さて、ここで稲盛さんは、「『動機善なりや』と自らに問わなければなりません」と述べておられますが、動機が善か否かということは、実際の場面では、中々判断が難しいことなのだと思います。稲盛さんも、同書の中で「第二電電(現 KDDI)設立前、約六カ月もの間、毎日、どんなに遅く帰っても、たとえ酒を飲んでいようとも、必ずベッドに入る前に、『動機善なりや、私心なかりしか』と自分に問い続けました。通信事業参入の動機が善であり、そこに一切の私心はないことを確認して、ようやく手を挙げたのです」と述べておられます。稲盛さんのような大きな決断ではなくとも、職業人として「動機善なりや」と自らに問いかけることは大切なことだと思いますし、ここでの「自問自答」という行為は、人間の成長にとっても重要なことだと思います。

また、「私心なかりしか」についてですが、稲盛さんは、仮に動機が善であっても、それだけでは十分でなく、「私心」の有無について、「動機善なりや」と一対のものとしてお考えになったのではないかと思います。そこで、「私心」とは何かが問題になるわけですが、稲盛さんは、ここで「自己中心的な発想」と述べておられます。辞書によると、「私心」とは、「自分一人の利益を図る心」(デジタル大辞泉)とありますが、稲盛さんは、独り善がりなものも含め、もう少し広い意味で捉えているのではないかと思います。もとより、何らかの怨みを持っている他者への意趣返しであるとか、他者を陥れるような心持ちなどは論外です。以前にもお話しましたが、そのような行為は、いつの日か何らかの形で自らに返って来ると思ふべきです。

余談ながら、明治の文豪、夏目漱石は、その晩年に「則天去私」ということを唱えました。これは、天道に則り、我執を捨て去るといった意味だと思いますが、稲盛さんの箴言にもどこか相通ずるところがあるように思われます。

令和6(2024)年6月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明